

荒川秀俊博士逝く

昭和59年12月23日、荒川秀俊博士は心不全のため逝去された。77歳であった。博士は1907年8月4日、福島県の白河で生まれ、1931年3月東京帝国大学理学部物理学科を卒業、直ちに中央气象台に入られた。予報掛で天気予報の実務をされたこともあり、後、調査部長になられた。1959年11月、中央气象台の機構改革があった折り、気象研究所に移られ、予報研究室長(後、部が変わる)となられ、1964年4月には福岡管区気象台長、1966年4月には気象研究所長となられた。1968年4月気象庁を定年退職後は東海大学理学部教授となられ、1983年までつとめられた。1972年5月16日には、日本気象学会から「研究および著述を通じての永年にわたる気象力学ならびに気象熱力学への貢献、および気象災害史の研究」によって藤原賞を受けておられる。

博士は多くの気象学に関する研究をされ、日本だけではなく、外国の雑誌にも多くの論文を発表し、世界的に知られた学者の1人であった。また、多くの著書もあり、編集もされた。1969年には、World Survey of Climatology の8巻、Climates of northern and eastern Asia の編集者になっている。中央气象台に入った翌年の気象集誌には、ロビンソン風速計に関する理論的研究を発表しているが、親友の佐貫亦男博士も同じ号に、同じ問題で書いておられる。

荒川博士は私より5年先輩である。私が中央气象台に入った頃は、予報掛で天気予報の技術の向上の研究をしておられ、また予報当番(現在の予報官)もされていた。この頃宇津木政雄氏(現在安齋)を助手とし、日本で初めて断熱図をつくられた。また、1935年には日本付近の各気塊の特性と題する論文を気象集誌に出し、気団論を外国から輸入したり、ペターセンのキネマティカルアナリシスを紹介するなど、天気予報の技術の向上に大きく貢献されている。また、1940年には、岩波書店から「気象力学」を出し、翌年には「気象熱力学」を出している。当時の、新進の気象学者であり、モダンボーイで

ダンスもされた。しかし、天気予報の実務は、あまり上手とはいえず、天気予報は当たったが、天気の方がはずれたなどと陰口をいう人もいた。

第2次世界大戦の頃からは、歴史に関心をもたれるようになり、その後多くの歴史と気象に関連する研究をされ、晩年までつづけられた。1944年には「戦争と気象」と題する岩波新書をかかれ、1947年には河出書店から「気象学発達史」を出しておられる。1955年に地人書館から出された、「気候変動論」には、古文書から江戸時代の米の収穫量、米価の記録などを発掘し、紹介しておられる。また、平家が源氏に敗れたのは平家が弱かったわけではなく、その頃西日本は干ばつで飢饉となったが、東国は農作で食糧が充分あり、それが原因であるという意味の学説を出されたことは有名である。この種の研究を書かれた著書は多くあるが、1968年に地人書館から出された「国史小品集」が標準的なものだろう。

気象研究所の予報研究部長の折りには、古文書から気象や気象災害に関する史料を集め、編集し、「日本旱魃・霖雨史料」、「異国漂流記」など多くの史料集を出しておられる。これは古気候を調べるときによい参考になる。地方に出張した時には、古本屋に立ち寄り、古い本をあさっておられたという。また、蔵書家としても知られ、お宅には多量の本を貯蔵しておられた。

博士の生涯を見ると、研究が主流であるが、第2次世界大戦中、風船爆弾の作戦に関与され、推算によって上層の天気図をつくり、その成功の可能性が大きいことを示された。また、戦後は、電力気象にも関心を持たれ、電力と気象に関する研究会の主査となられたこともある。また、災害にも関心を持ち、東京タワーの風速の高度分布に関する論文もあり、1964年には、宝文堂から「災害の歴史」を出しておられる。

誠に博士といわれるにふさわしい生涯であった。

(高橋浩一郎)